

野々口立圃『十帖源氏』の初版と覆刻

沼尻，利通

<https://doi.org/10.15017/4742017>

出版情報：雅俗. 13, pp.2-13, 2014-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中的図は非表示



野々口立圃『十帖源氏』の初版と覆刻

沼尻 利通

はじめに

『十帖源氏』は、江戸時代の源氏物語の挿絵入り梗概書である。著者の野々口立圃は俳人として名をなしたが、若い頃は松永貞徳の門下であった。松永貞徳は『源氏物語』などの古典作品を重んじ、その弟子たちも『絵入源氏』の山本春正や『湖月抄』の北村季吟など、近世を代表する『源氏物語』の本文を出版した人物を多く輩出した。立圃もその影響を受けていたことは疑いがなく、彼の発句に「源氏ならで上^{じやう}下^げにいふ若菜哉^{かな}」「夕霧に雲井の鴈^{かり}やあまへ声」とあり⁽¹⁾、『源氏物語』は立圃の詩囊を肥やしていた。

立圃の手がけた『十帖源氏』の研究は、挿絵の研究や梗概化の方法などが論じられることが多い⁽²⁾。諸版の研究は、吉田幸一「『十帖源氏』考⁽³⁾」という論文が最初で最後と言つてよく、それ以後は積極的に論じられることはない。これは、吉田論文の講究が優れているからにはかならない。吉田論文によると、立圃の跋文・刊記の有無により、『十帖源氏』は四種類ある。以下、その分類を引用すると、

A 万治四年荒木利兵衛版⁽⁴⁾この刊本には巻末に署名のない跋文があり、そのあとに「万治四年卯月吉辰 荒木利兵衛板行」

の刊記があるもの。

B 万治四年立圃自跋本⁽⁵⁾巻末の跋文に「万治四年卯月吉辰 立圃」とあり、刊記を欠くもの。

C 立圃自跋無刊記本⁽⁶⁾巻末の跋文に立圃の署名があるのみで、刊記がないもの。

D 無跋無刊記本⁽⁷⁾巻末の跋文も刊記もないもの。

と、四つに弁別している。成立順は、D→C→A→Bであり、Aの刊記「万治四年」（二六六一年）は、あくまで刊行年であつて、成立はそれより前に遡るとする。分類方法や、成立に関する考察も、説得力のある論文である。これらのことについては、特に異議はない。

ただ、一点、よくわからないことがある。これら四種類の版本の板木はどうなっているのか、という点である。覆刻の可能性はないのだろうか。吉田論文をみると「絵入『十帖源氏』十卷十冊の現存諸本は、すべて同一版式によるものばかりである」とされ、「A本もまた跋文の署名部分を改変したものであることがわかり、B本同様に後印本であることになる」と、「後印」と表現していることから、四種類の板木は同一であると読み取れる。この考え方は、広く認められている⁽⁴⁾。『十帖源氏』には、摺った原版は同一のもので、重刷（重印）のものもある

るといふわけだ。しかし、この考え方は果たして妥当なのだろうか。本稿では、『十帖源氏』の覆刻について考察していきたい。

一、諸本の行の高さ

版本の覆刻を明らかにするためには、諸本の匡郭を計測するのがオーソドックスな方法である。現代の工場制機械工業で生産される本は、初版と覆刻はほぼ同じ物を生産することが技術的に可能である。したがって、生産される本も、初版と覆刻でほぼ同じサイズのものを作ることができる。しかし、江戸時代の版本は違う。いくら精度を期して複製を作ったとはいえ、そして技術が優れているとはいえ、家内制手工業による生産物である。手で彫る作業があるため、板木が切りかわれば自ずと差異が出てしまう。この差異は具体的には匡郭の寸法などに表れることが多い。覆刻の匡郭の寸法に違いが出てしまうのである。それを利用して諸版を分類した論文は、木村三四吾『西鶴織留』諸版考⁵⁾」が著名である。『十帖源氏』の本文には匡郭がないため、一行の長さを測ることによって、その違いを明らかにできる。『十帖源氏』の諸版を調査し、本文の特定の箇所の高さを測ってみた。その結果が次の表である。

「種類」は、先に示した吉田論文による分類方法を用い、Aは国文学研究資料館初雁文庫本（国文研雁・請求番号：12/486/1-10）、東洋文庫本（東洋文Ⅶ・請求番号：Ⅶ/2-F-a22）。Bは九州大学附属図書館支子文庫本（九大支子・請求番号：913/シ-3/1-10）、佐賀大学附属図書館小城文庫乙本（佐賀大乙・請求番号：091/10/（1）～（10））。C

所 蔵 先	国文研雁	東洋文Ⅶ	九大支子	佐賀大乙	早大五冊	京大人環	佐賀大甲	祐徳中川
種 類	A	A	B	B	C	C	D	D
卷一序文冒頭	18.9	18.8	18.8	18.8	19.4	19.4	19.6	19.6
卷一「桐壺」冒頭	19.0	19.0	19.0	19.0	19.6	19.6	19.8	19.8
卷一「空蟬」最終丁	19.0	19.0	19.0	19.0	19.4	19.5	19.7	19.6
卷二「夕顔」冒頭	18.9	18.8	18.8	18.8	19.4	19.3	19.5	19.5
卷二「葵」最終丁	19.1	19.0	19.0	19.0	19.6	19.6	19.8	19.8
卷三「櫛」冒頭	19.3	19.2	19.2	19.2	19.8	19.8	19.9	19.9
卷三「絵合」最終丁	19.2	19.1	19.2	19.2	19.6	19.5	19.5	19.6
卷四「松風」冒頭	19.3	19.2	19.2	19.2	19.7	19.7	19.8	19.8
卷四「乙女」最終丁	19.2	19.3	19.4	19.2	19.8	19.8	20.0	20.0
卷五「玉鬘」冒頭	19.4	19.3	19.2	19.1	19.7	19.7	19.9	19.9
卷五「真木柱」最終丁	19.0	18.9	19.0	19.0	19.5	19.5	19.6	19.7
卷六「梅枝」冒頭	19.4	19.3	19.4	19.4	19.6	19.6	19.8	19.9
卷六「若菜下」最終丁	19.2	19.2	19.3	19.3	19.7	19.6	19.8	19.7
卷七「柏木」冒頭	19.0	19.0	19.0	19.0	19.5	19.5	19.7	19.7
卷七「竹川」最終丁	19.2	19.3	19.1	19.4	19.5	19.7	19.8	20.0
卷八「橋姫」冒頭	19.5	19.5	19.4	19.4	19.8	19.9	20.0	20.0
卷八「角総」最終丁	15.5	15.5	15.4	15.5	16.0	16.1	16.0	16.1
卷九「早蕨」冒頭	19.4	19.4	19.3	19.3	19.9	20.0	20.0	20.0
卷九「浮舟」最終丁	19.4	19.3	19.4	19.5	19.7	19.8	19.7	19.7
卷十「蜻蛉」冒頭	19.5	19.4	19.5	19.4	19.7	19.8	19.9	19.8
卷十「夢浮橋」最終丁	19.0	19.0	18.9	19.0	19.5	19.6	19.8	19.7
卷十跋文冒頭	18.5	18.5	18.7	18.7	19.3	19.3	なし	なし

は早稲田大学図書館五冊本（早大五冊・請求番号：く12/02847/1）
②、京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館本（京大人環・請求番号：0952/1）林文庫）。Dは佐賀大学附属図書館小城文庫甲本（佐賀大甲・請求番号：091/9/1）（10）、祐徳稲荷神社中川文庫本（祐徳中川・請求番号：6/21/30）。以上の諸本を用いた。

「巻一序文冒頭」は、巻一の序文冒頭部一行目「光源氏物語ハ村上天皇女十宮大斎院」の箇所である。数字は、この一行の長さ（高さ）を計測した数値であり、センチを規準にした。序文の一行目は、国文学研究資料館初雁文庫本は一八・九センチ、祐徳稲荷神社中川文庫本は一九・六センチである。巻一は序文も計測したが、本文も計測している。「巻一「桐壺」冒頭」とは、巻一の「桐壺」巻の冒頭一行目のことを示している。「桐壺」巻は三丁表から始まっており一行目は「いつれの御時にか女御かうゐあまたさふらひ給ける」である。この一行の長さを計測した。巻の冒頭部だけではなく、それぞれの巻の最終丁の一行目の長さも計測した。「巻一「空蟬」巻最終丁」は、巻一の「空蟬」巻の最終丁一行目のことをさす。巻一の最後の巻は「空蟬」巻である。二九丁裏が最終丁で、その一行目が「つけもなしうつせみの君もあさからぬ御けしき」とあり、この行の高さを計測している。巻三、四、五のように、最終丁が本文ではなく挿絵の場合もある。その場合は、その前の丁の一行目（挿絵が裏の場合は表の本文の一行目）を計測した。巻十は、「夢浮橋」巻の最終丁の裏が挿絵のため、表の本文を計測している。巻十は最終巻で、D以外には跋文がある。跋文の冒頭一行目「此一部年来心にしめて見れ共くは、き、の」も計測した^⑥。なお、佐賀大学附属図書館小城文庫甲本には、立圃自筆の跋文が付され

ているが、もとは跋文のないDに分類される本である。自筆の跋文は計測せず「なし」とした^⑦。

このように各巻で共通する冒頭本文一行目、最終丁一行目の、一行の長さを計測し、一覧表にしてみると、A、BとC、Dの二つに分類できる。すなわち、A≡B、C≡Dのそれぞれ二種類の板木があったことになる。ただ、巻七「竹川」巻の最終丁一行目は、いささか疑問に感じられる人がいるだろう。早大五冊本は一九・五センチで、佐賀大甲本と祐徳中川本は二〇センチ。早大五冊本の数値は、AやBの佐賀大学乙本に近似するから、この巻七のCに関しては、AとBの板木によるのではないかと、値の上では感じられるところである。しかし、これは早大五冊本固有の問題である。巻七「竹川」巻の最終丁一行目は「ねはさらに参給はす年ころありて又おとこみこ」の文であるが、ここの文の末尾「みこ」の「こ」が、早大五冊本は虫損により「こ」の下線の線が計測できない。したがって、結果としてAやBに近似した値になっただけである。

こうした例外はあるものの、およそ全巻にわたって、AとB、CとDと二つに分類でき、それぞれの数値が近似する。AとB、CとDと比べると、AとBの方が五ミリほど縮小した値となる。このことは、AとB、CとDの板木が違うことを物語っている。板木や紙は、湿度の変化によって多少の伸縮がある。したがって、同じ板木で摺られたとしても、ミリ単位では一致しない。およそ二〜三ミリほどの差異はできてしまう。ただし、五ミリ以上は、板木や紙の伸縮では説明できない。AとB、CとDの板木は異なったものであり、覆刻は、『十帖源氏』の全巻にわたってなされたものである。

二、取り合わせ本

先に示した表から、『十帖源氏』の版本は、A≡B、C≡Dと、二つに分類でき、それぞれ板本が異なっていることが推測できた。先の一覽表以外の本を調査⁸⁾しても、その値はほぼ一致する。ただ、諸本を調査していくと、いくつかの取り合わせ本が見られる。例えば、東海大学附属図書館蔵桃園文庫の乙本（桃園文乙・請求番号…桃8103）や、早稲田大学図書館の十冊本（早大十冊・請求番号…文庫30/a213）である。先の表で計測した箇所と同じ行の高さを計測し、表にしてみた。桃園文庫乙本も早稲田大学十冊本も共に跋文がなく、したがってDに分類される。しかし、詳細に検討すると、両本ともにAかBの本を取り混ぜたものである。桃園文庫乙本は、巻四、巻七、巻八。早稲田大学十冊本は巻一から巻八まで。それぞれの巻の行の高さを計測す

所 蔵 先	桃園文乙	早大十冊
巻一序文冒頭	19.7	18.7
巻一「桐壺」冒頭	19.9	19.2
巻一「空蟬」最終丁	19.7	19.0
巻二「夕顔」冒頭	19.5	18.8
巻二「葵」最終丁	19.8	19.1
巻三「榊」冒頭	19.9	19.3
巻三「絵合」最終丁	19.6	19.2
巻四「松風」冒頭	19.4	19.3
巻四「乙女」最終丁	19.3	19.3
巻五「玉鬘」冒頭	19.9	19.4
巻五「真木柱」最終丁	19.9	19.1
巻六「梅枝」冒頭	20.0	19.4
巻六「若菜下」最終丁	19.8	19.2
巻七「柏木」冒頭	19.0	19.0
巻七「竹川」最終丁	19.2	19.5
巻八「橋姫」冒頭	19.3	19.5
巻八「角総」最終丁	15.4	15.5
巻九「早蕨」冒頭	20.0	20.1
巻九「浮舟」最終丁	19.8	19.8
巻十「蜻蛉」冒頭	19.9	19.9
巻十「夢浮橋」最終丁	19.8	19.7
巻十跋文冒頭	なし	なし

ると、AかBの版本を取り混ぜていることがわかる。

桃園文庫乙本は、現物を見ると取り合わせ本であることが一目でわかる。桃園文庫乙本は、全体を瞥見すると、漢字にかなをふった書き入れが多く見られ、一部、朱が入ったものが目につく。しかし、巻四、七、八には書き入れがない。その上、丁の下部を、一・三センチばかりの紙が加えられ、本の高さを揃えるよう細工されている。巻四、七、八は違った出自のものが、後に加えられたことは明らかである。憶測で言うなら、もともなったDの本の、巻四、七、八が何らかの事情で欠けてしまった。かわりにAかBの本の、巻四、七、八を加えた。しかし、本の高さが違い、見栄えが悪い。巻一、二、三、五、六、九、十の本を削って、本の高さを揃えるよりも、巻四、七、八の丁の下部に紙を貼り、高さを揃えれば、あたかも揃いの本のような見栄えになる。このような細工は、古書肆の手によるものと想像される。揃いの本であったほうが売れるからである。この桃園文庫乙本は、吉田幸一が「初版初印本」と高く評価し、その装訂を「原装本」としている⁹⁾が、それは誤りである。取り合わせ本であり、装訂も後人の手になると考えるべきである。

早稲田大学十冊本は、本の高さは揃えてある。桃園文庫乙本のように紙を加えるのではなく、大きい方を削り、揃えたと考えられる。巻九、十には書き入れが多く見られ、対して巻一から巻八までの本には書き入れはさほど見られない。行の高さから勘案するに、AかBの巻一から八と、Dの巻九から十を合わせ、本の高さを揃え、あたかも揃いであつたかのように見せた本であることが推測できる。

いずれにせよ、先に示した表によって、『十帖源氏』のAとB、Cと

Dは、二種類の板木があり、どちらかがどちらかの覆刻であることは明らかである。

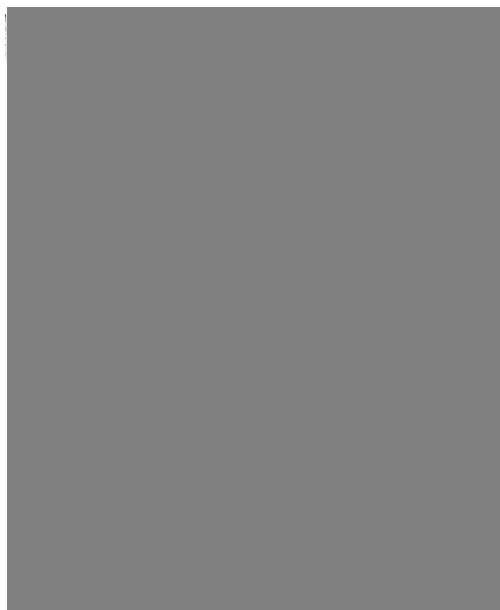
三、絵の相違点

AとB、CとDは、それぞれ板木が違っていたようである。そういう目で、それぞれの挿絵を見ていくと、AB、CDは、微妙に異なっていることに気付く。この挿絵の違いは、卷二「若紫」巻、「雀の子をいぬきが逃がしつる」の挿絵での、雀の有無に端的に表れている。A Bの版では、雀が描かれておらず、CDの版では、雀が描かれている。このことは、清水婦久子により指摘され⁽¹⁰⁾、拙稿でも佐賀大学小城鍋島文庫の甲本(D)と乙本(B)を素材にして、卷四「乙女」、卷五「野分」、卷七「竹川」、卷九「東屋」、卷十「手習」、卷十「夢浮橋」での画像を比較考察したことがある⁽¹¹⁾。本稿では、先に検討した図版以外のものを用いて、その相違点を検討していきたい。なお、比較に用いた図版は、Bに分類される酒田市立図書館光丘文庫本(以下、光丘文庫本)と、Dに分類される祐徳稲荷神社中川文庫本(以下、中川文庫本)によった。

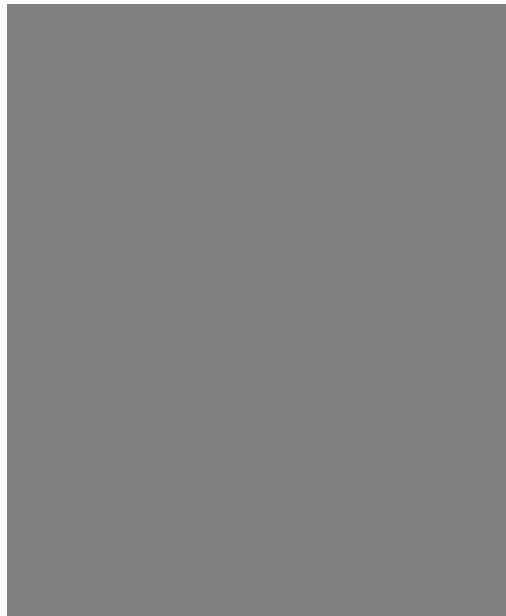
まずは、卷三「花散里」巻、光源氏が麗景殿女御のもとを訪問し、時鳥の和歌を詠み交わす図版である。右上に月が描かれ、月の左下には時鳥が確認できる。中央やや上に光源氏があり、左下には几帳に隠れた女君がいる。この図版は、よく見ると微妙に異なる。例えば女君の右の御簾の縁と壁の縁を注目すると、図版1の中川文庫本は模様を黒抜きにしているが、図版2の光丘文庫本では模様を白抜きにしてい

著作権保護のため図は非表示

卷三「花散里」巻



【図版2】B光丘文庫本



【図版1】D中川文庫本

卷十「夢浮橋」巻の拡大



【図版3】D中川文庫本の拡大



【図版4】B光丘文庫本の拡大

る。また、右上から蛇行する遣水の流れも、図版1は丁寧な線が描かれているが、図版2では、線がはっきり描かれていない。これは、図版で示した中川文庫本、光丘文庫本に固有の現象ではない。取り合わせ本などの特殊な例を除けば、先に示した諸本でも確認できる。中川文庫本の図版は、C、Dに分類される諸本にも確認でき、一方、光丘文庫本の図版はA、Bに分類される諸本にも確認できる。すなわち、御簾の縁の模様を白抜きとするものがA、Bで、黒抜きがC、Dである。もう一つ、わかりやすい指標となる図版の異同を示しておきたい。

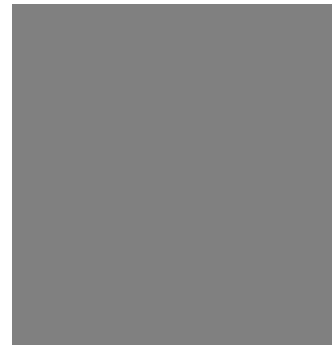
卷十「夢浮橋」巻の終末、小君が手紙を片手に殿舎の前にたたずむ図版がある。この殿舎の右に窓がある。この窓の縦の筋が、図版3、4のように、明らかに異なっている。図版3は多くの筋があるが、図版4は少ない。これは、先に示した諸本でも同じで、C、Dの版は図版3のように、A、Bの版は図版4のようになっていく。

この二例は、わざわざここだけを埋木で訂するような箇所ではない。これらの違いは、板木が切りかわったとしか説明がつかない。では、どちらの版が初版で、どちらの版が覆刻なのか。それを明らかにするためには、図版の異同を細かく確認していくしかない。A、BとC、

卷六「梅枝」巻の拡大



【図版5】D中川文庫本の拡大



【図版6】B光丘文庫本の拡大

Dの版の図版の相違点は、注意深く見ていくといくつか確認できる。

卷六「梅枝」巻で、光源氏が女房に墨をすらせている図版。墨をする女房の手元を拡大してみると、図版5の女房の手には墨が握られているが、図版6の女房の手には、墨がない。この図版は、本文の「女房二三人はかりすみすらせて」を絵画化したものである。したがって、墨をすつてないと困る。こうしてみると、C、Dの図版は、より精確に描いており、A、Bの図版は墨を手にとっておらず、間が抜けている。A、Bの図版にはいささか粗雑なところがあると考えて良いようである。

図版の粗雑さという視点から、次の二点を比較してみたい。一つは、「総角」巻で、禁足中の匂宮が、女一宮のもとで絵を描いている挿絵である。格子が室外に向けて上げられている。格子の下から、欄干にかけての箇所注目したい。筆を手にする匂宮の左上にあたる箇所である。図版7では、格子と欄干の間に、その向こう側から生える木の繁茂する葉が確認できる。ところが、図版8では、格子と欄干の間は空白である。図版8は、おそらく図版7をもとにして作られたと考えら

卷八「総角」巻



【図版7】D中川文庫本



【図版8】B光丘文庫本

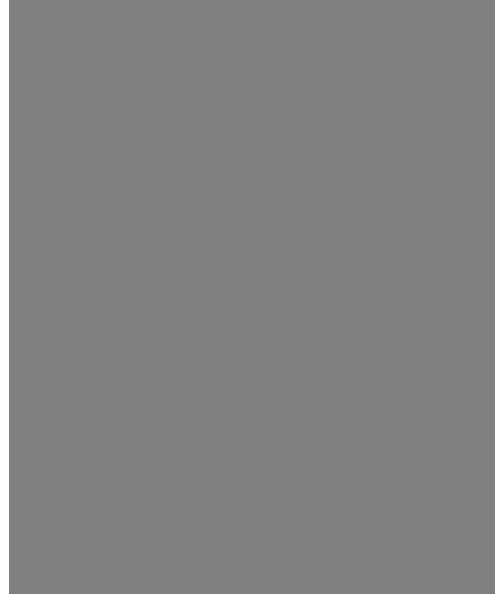
れる。すなわち、C、Dが初版で、その覆刻がA、Bである。覆刻は、初版を忠実に写そうとしたものの、完璧には写せず、いささか粗雑になった。意識的な省略か、単純なミスかは判別できないが、A、Bは絵の精確さに疑問符がつく。

いま一つ、「浮舟」巻、匂宮が浮舟のもとに赴く挿絵。図版9は、上部にみえる山々や雲の線が細かく描かれている。また、馬の周辺にも線が描かれ、左下の岩も丹念に描かれている。ところが図版10では、それら細かく描かれていた線が省略されている。この挿絵の重要なところは、出かけていく匂宮とその一行であるから、絵の勘所は押さえられており、山々や雲、岩などはどうでもよい。ただ図版の精密さという点では、図版9が精密であり、図版10は粗雑である。

卷九「浮舟」巻



【図版10】B光丘文庫本



【図版9】D中川文庫本

これらの例は、図版に示した中川文庫本や光丘文庫本の固有の現象ではなく、他の諸本でも、C、Dの図版は精密であり、A、Bの図版はいささか粗雑である。この現象は、同じ板での摺りが重なったために線が摩滅した、もしくは版摺職人の馬棟の加減に起因するのではなく、板が切りかわったことによるものと考えるべきである。以上のことを勘案すれば、C、Dは初版、A、Bは覆刻と考えられる。C、Dがもとになり、A、Bが覆刻された。被せ彫りで覆刻を作るさいに、細かな箇所が省略されたり、ミスが生じた。ただ、絵の要諦は押さえられているために、わざわざ修正しなかったのだろう。

以上、本稿では、卷三「花散里」、卷六「梅枝」、卷八「総角」、卷九「浮舟」、卷十「夢浮橋」の図版の比較をおこなった。図版の異同を検討すると、AやBの図版は、CやDの図版と比べ、景物などの描き方に省略がみられた。このことから、丹念に描かれたC、Dが初版であり、被せ彫りによる覆刻を作成するさいに、景物など細かい所を彫り落したり、省略したものがA、Bであると推測できた。なお、取り合わせ本における絵の比較においても、行の高さの数値による分類結果とは矛盾しない。『十帖源氏』には二つの板木が存在したのである。

四、二つの板木

『十帖源氏』の跋文に「老て二たび児に成たりといふにや」との文言がある。これが立圃の還暦をさすと考え、承応三年（一六五四年）ごろの成立とする、渡辺守邦の説がある¹²⁾。「老て二たび児に成たり」の文言は、辞書によれば「老人となり、理解、記憶、判断などの能力が

衰えて、子供のようになる。もうろくして子供のように他愛なくなる¹³⁾」との意味で、特別に還暦をさす表現ではない。ただ、立圃は、還暦の年の十二月に、「老は児年も二たび小春哉」との巻末発句を残している¹⁴⁾から、これと跋文が呼応すると考えれば合点がいく。『十帖源氏』の跋文には「まして齢かたふきたそがれのそらめあやしくまき返す手もたゆし」と、老年の衰微が描かれており、渡辺守邦による跋文執筆時を還暦とする説は首肯できる。

跋文は、C、Dが作られた時期に書かれたことは間違いがない。Dの無跋無刊記が先にあり、そこからCの跋文が書かれたのである。というのも、佐賀大学附属図書館小城文庫甲本に、立圃自筆の跋文があるからである。佐賀大学小城文庫甲本は、もとは無跋無刊記本であるが、巻末の白紙に、跋文と立圃の署名と花押が書かれている。立圃の署名付きの跋文は、B、Cに確認できるものであるから、それらを手本にして、何人か^{なんびと}が写した、とも考えられるところだ。ただ、佐賀大学小城文庫甲本には、立圃の花押が書かれており、これが決定的な証拠となる。B、Cとも、「立圃」の署名はあるものの花押がない。そのことから、佐賀大学小城文庫甲本の跋文は立圃自筆であることは疑いがなく、したがってDがCより先行していた根拠になる。問題は、これらDとCはどのような板木だったのか、ということである。承応三年の還暦前後に、立圃は『十帖源氏』を脱稿し、すぐに版下に回し、Dが板行された。ただ跋文がなかったため、ほどなく同じ板木に跋文を追加し、Cを板行した。これらDやCの由来である。DやCの板木による本は、おそらく貴紳や門弟らに配布されたものであろう。いわば私家版であり、利益を求めるようなものではなかった。それゆえに、

ある程度の部数を刷ったら、板木は破却したか、あるいは失われたと考えられる。

ただ、洛陽紙価の喩えのように、人々は立圃の『十帖源氏』を求めた。あの長大な源氏物語が、挿絵付きでわかりやすく、和歌を中心にコンパクトにまとめられているのだ。この人氣に目を付けた書肆が、京の荒木利兵衛である。万治四年（一六六一年）四月に、『十帖源氏』の覆刻を出版することになる。出版のさいに、制作費を低く抑えるため、DとCの板木を譲り受けたかったに違いない。しかし、初版の板木はすべて失われてしまっていた。そのため、初版の本を被せ彫りにして、覆刻したのである。その覆刻した本がAということになる。覆刻の図版にはミスや省略がわずかながら散見されるものの、おおむね忠実に初版を覆刻し、絵もほとんど同じ物と見紛う出来であることから、覆刻にさいしては、かなり腕のたつ職人に頼んだはずだ。長らくA、B、C、Dが同一の板木によると考えられてきたことから、その腕の良さは証明できる。荒木利兵衛による覆刻は、立圃の承認のも行われたはずである。米谷巖「野々口立圃年譜」の寛文元年（一六六一年）一月一九日の条に、川崎二郎左衛門宛返信として「『十帖源氏』が出来たので式部持参したこと。紙を別段に大きく刷らせることは難しいので堪忍願いたいこと」との記述がある⁽¹⁵⁾。万治の年号は、万治四年四月二五日に寛文に改元されるから、この書簡は精確には万治四年一月一九日のものと考えられる。この年譜に示された書簡は「川崎方孝宛立圃書簡集」〔諸家自筆本集〕天理図書館綿屋文庫俳書集成 第三五卷 八木書店 一九九九年 三二六頁）に収載されている。この書簡には、京を「罷立」、その後「伏見二一夜舟二一夜昨朝

是へ罷帰申候」とある。京から伏見を経由し「是」に「罷帰」のである。「是」は大坂であろう。「罷帰」とあるから、立圃が大坂に住していた時期、すなわち万治から寛文の頃の書簡と考えられる。立圃が還暦を迎え、『十帖源氏』の初版を発行しただろう承応三年（一六五四）頃、立圃は京に住し、江戸とさかんに往還しており、大坂に「罷帰」とするこの書簡の表現と矛盾する。万治年間には、立圃は大坂に住していたから、京都から大坂に「罷帰」とする、この書簡の記述とは矛盾しない。この書簡に出てくる『十帖源氏』は初版でなくして覆刻と考えるほかない。万治四年の一月には、『十帖源氏』の覆刻はできあがっていたことになる。Aの刊記は万治四年四月ではあるものの、出版は刊記通りでないことは、現在も同じである。ちなみに、同年に、立圃は『おさな源氏』を出版している。『おさな源氏』は、『十帖源氏』をさらに簡略にした、婦女子向けのものとされる。『おさな源氏』の出版は『十帖源氏』の好評を受けてのものに相違ない。『十帖源氏』の覆刻は多くの読者により待望されていたと考えられる。

さて、吉田幸一の調査によると、元禄期に販売されていた『十帖源氏』は「多さうしや」、すなわち鶴屋喜右衛門のものとされている⁽¹⁶⁾。いつの頃かは不明だが、『十帖源氏』の覆刻の板木は、荒木利兵衛から鶴屋喜右衛門に移った。そのさいに、「荒木利兵衛板行」の文言は削られ、「立圃」の署名が加えられた。この本がBである。

かくして、D、Cの板木は初版で、A、Bの板木はそれを覆刻したものである。初版はDからCという順で、立圃の還暦前後に出された。これらの板木は失われてしまい、その後、覆刻が万治四年には荒木利兵衛により出され（A）、その覆刻の板木は別の書肆に渡り、出版され

ていた(B)、ということである。

おわりに

吉田幸一により、『十帖源氏』は四種類に分類された。成立はD↓C↓A↓Bの順であり、同一の板木によっていると考えられてきた。成立順には異論はないが、板木は切りかわっている。CとAの間には断絶があり、DとCの初版に対し、その覆刻がAとBである。初版の代表的な本とされた桃園文庫乙本は、取り合わせ本であり、初版の完本ではない。Dの初版の代表的な完本としては、佐賀大学小城文庫甲本か祐徳稲荷神社中川文庫本を示すべきであろう。特に、佐賀大学小城文庫甲本は、立圃自筆の跋文があり、CとDの先後を究明する貴重な資料である。

本稿では、諸本の各巻の冒頭一行、最終丁一行目の行の長さ(高さ)を計測し、それぞれの板木の違いを考察した。これ以外にも、挿絵の違いからも、DとC、AとBの板木の切りかわりは証明できた。覆刻は、万治四年(一六六一年)前後、荒木利兵衛によってなされたもので、後に鶴屋喜右衛門に求版されたようである。

以上、初版と覆刻について考察してきたが、未調査の本も多い。島内景二が紹介^①した長崎市歴史民俗資料館の『十帖源氏』の断簡も未調査である。島内景二によれば、「長崎市歴史民俗資料館の『十帖源氏』の挿絵十八枚は、従来知られている『十帖源氏』の挿絵とは、すべて異なる板木から刷られている」「しかも十八枚のうち七枚が、従来知られている挿絵とは左右反転している」とのことである。非常に興

味深い発見である。ただ、残念なのは、これが「本」であったか疑問が残るところだ。島内景二は、『十帖源氏』が、「あるいは、長崎で新たに刷られた可能性もある」とするが、本文は残っておらず、図版のみの断簡であることを考えると、『十帖源氏』の図版だけを被せ彫りにしたもので、その絵画を土産などにした可能性も捨てきれない。『十帖源氏』の地方版があったかどうかは、現存する諸本での報告はなく、現状では不明とするほかない。諸本についての調査は今後ともすすめていく必要がある。

また、初版と覆刻の本文の違いについては、詳細な調査をおこなっていない。ざっと瞥見して気付いた異同箇所をあげると、一つは、巻二「葵」巻の四五丁オにある「いまも見てなか／＼袖をくたすかな」の和歌に付された「大宮」の箇所が、初版は「大」の上部が少しく削れて印刷されている。被せ彫りにしたさいには「大」を削除したらしく、覆刻では「宮」となり、「大」の片鱗も見えない。これは初版の板の瑕疵から生じたものと考えられる。いま一つ、巻八「角総」巻の二三丁オ一行目「かほるの御心の有かたうあはれなれはこよなうも、」の末尾部分「も、」は、初版は踊り字であるが、覆刻では「もも」と、踊り字が「も」に切り替わっている。覆刻にさいして、大幅な本文の差し替えなどはおこなっていないようだが、かような微調整が行われたようである。本文の細かな違いは、今後の課題としたい。

注

(1) 『犬子集』(『初期俳諧集』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九一年 一三頁・九四頁)。

(2) 湯浅佳子「立圃『おさな源氏』『十帖源氏』」(鈴木健一編『源氏物語の変奏曲——江戸の調べ——』三弥井書店 二〇〇三年)、中西健治「十帖源氏致」(『源氏物語のなごり——梗概本・後期物語など——』新典社 二〇一三年)、阿美古理恵「野々口立圃編『十帖源氏』における松永貞徳の影響——山本春正との比較を通じて——」(『哲学会誌』(学習院大学哲学会) 第三二号 二〇〇八年五月)、石渡健児「十帖源氏」から「おさな源氏」へ——その梗概化の方法・「末摘花」巻の場合——」(『國學院大學大学院平安文学研究』第一号 二〇〇九年九月) など。

(3) 『繪入本源氏物語考』(上 日本書誌学大系 青裳堂書店 一九八七年一九五頁)。

(4) 中野幸一編『源氏物語資料影印集成』(第二卷 早稲田大学出版部 一九九〇年 四頁)の「解題」、伊井春樹『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版 二〇〇一年 三九七頁)、島内景二「変革の時代と源氏文化——文化統合システムとしての役割——」(高橋亨・久富木原玲・中根千絵編『武家の文物と源氏物語絵——尾張徳川家伝来品を起点として——』翰林書房 二〇一二年 四八四頁)、など。

(5) 『書物散策——近世版本考——』(木村三四吾著作集Ⅲ) 八木書店 一九九八年。なお、初出は「西鶴織留諸版考」(『ビブリア』第二八号 一九六四年八月)。

(6) 以下、計測した行をそれぞれ記す。なお、巻の冒頭は巻の名前が書かれているが、それは計測の対象外とし、各巻の冒頭一行目、各巻の最終丁一行目を計測した。巻二「夕顔」巻冒頭「同じき年の夏六条院の御休所へしのひてか」。巻二「葵」巻最終丁「かうしもやはこそおもひつれあはれにかたしけな」。巻三「櫛」巻冒頭「斎宮の御くたりちかつくま、に御休所物心ほそく」。巻三「絵合」巻最終丁「参らせらる女はうのさふらひに北南にわかれて」。巻四「松風」巻冒頭「東の院作りたて、花散里うつろはし給ふ西の」。巻四「乙女」巻最終丁「ふたに花紅葉こきまかせておほきやかなるわらはの」。巻五「玉鬘」巻冒頭「年月へた、りぬれと夕かほの事わすれ給はす」。巻五「真木柱」巻最終丁「すくせとかしつき聞え給ふ又いかなるおり

にかありけん」。巻六「梅枝」巻冒頭「明石の姫君十二才御もぎの事おほしいそく朱雀院」。巻六「若菜下」巻最終丁「いたくわつらひ給ふおと、母北方さはぎてよそくにて」。巻七「柏木」巻冒頭「あもんのかんの君のなやみおこたて年もかへりぬ」。巻七「竹川」巻最終丁「ねはさらに参給はす年ころありて又おとこみこ」。巻八「橘姫」巻冒頭「八の宮はおはやけわたくしにより所なくさし」。巻八「角総」巻最終丁「ゆくすゑかけてなにしたのむらん」。巻九「早蕨」巻冒頭「中君は春のひかりを見給ふにいかてかくなからへ」。巻九「浮舟」巻最終丁「けれど少将のかたのなやみ侍れはその近き寺」。巻十「蜻蛉」巻冒頭「宇治にはうき舟のおはせぬをもとめさけと」。巻十「夢浮橋」巻最終丁「給ふ人あらはわつらはしかるへき事と見るも心くる」。

(7) この佐賀大学小城文庫甲本については、沼尻利通「佐賀大学小城鍋島文庫『十帖源氏』の挿絵と覆刻」(白石良夫・青木歳幸「小城藩と和歌」直能公自筆『岡花二十首和歌』の里帰り)『佐賀大学地域学歴史文化研究センタ― 二〇一三年一〇月』で詳しく考察した。

(8) 他に、以下の本を調査した。Aは、大阪府立中之島図書館(請求番号・甲和809)。Bは、東洋文庫本(請求番号・三上3384)、桃園文庫甲本(請求番号・桃8103)、京都大学総合図書館(請求番号・30/シ/セ)、筑波大学附属図書館本(請求番号・ル15611)、大阪府立大学図書館(大阪女子大学旧蔵)甲本(請求番号・91336/7421~10)。Cは、国会図書館本(請求番号・12691)、鶴見大学図書館本(請求番号・913365/N)。Dは、大阪府立大学図書館(大阪女子大学旧蔵)乙本(請求番号・91336/7421~10)。なお、大阪府立大学図書館(大阪女子大学旧蔵)の甲本と乙本は、両本とも巻三を欠く。また、筑波大学附属図書館本は、巻一の目次・序文は補写。

(9) 注3 二〇九頁。

(10) 『十帖源氏』『おさな源氏』と無刊記本『源氏物語』——若紫巻の本文——(『青須我波良』第五八号 二〇〇三年三月)。

(11) 注7参照。

(12) 「十帖源氏」の項(『日本古典文学大辞典』第三巻 岩波書店 一九八四

年 二七七頁。

(13) 「おいて再(ふたた)び稚児(ちこ)になる」の項(『日本国語大辞典』第二版 第二巻 小学館 二〇〇一年 八三一頁)。

(14) 米谷巖「野々口立圃年譜」(『十帖源氏』下巻 古典文庫 一九八九年 四六九頁)。

(15) 注14 四八〇頁。なお、この書簡は尾形仿「立圃書簡十八通ほか」(『連歌俳諧研究』第四一号 一九七一年九月)には「寛文二年(一六六二、立圃六十八歳)正月十六日、京より大阪へ下り、十九日、宿所にて認めたもの」とある。注14米谷説とは微妙に食い違いますが、万治から寛文頃の書簡とする点では共通している。

(16) 注3 二〇七頁。

(17) 注4 島内論文 四八四頁。

※本研究は、白石良夫先生が主宰する研究会(小城鍋島文庫『十帖源氏』研究会)での成果です。ご指導いただいた諸先生方、会員諸氏に感謝いたします。資料の閲覧をご許可くださった諸機関、ならびに、図版の掲載をご許可くださった、祐徳稲荷神社中川文庫、酒田市立図書館光丘文庫、国文学研究資料館に感謝いたします。本研究はJSPS科研費22820043、24720099の助成を受けものです。